

1

照準の固定を告げる無機質な電子音と、幾重にも連なる砲門の旋回音が、雨の新宿に冷たく響き渡った。

ひび割れたアスファルトの裂け目から噴き上がる白濁した蒸気と、冷たい氷雨。

その向こう側に聳え立つのは、体長十数 m、数千 t もの質量で都道を陥没させている機械竜―三式へと改修・再武装されたムゲンドラモンの巨体だった。

鋼の怪物の肩部装甲、巨大な砲塔の基部に立つ渡辺直人が、焼けただれた右半身の皮膚を引き攣らせながら、丸眼鏡のレンズ越しにねっとりとした視線を落としている。

マッハモンのシートから降り立った勇太の右上腕では、錆びた鉄筋に食い破られた傷口が脈動に合わせて熱い血を滲ませていた。

急制動の慣性で裂けた筋肉が悲鳴を上げ、巻いていた止血材の隙間から滲み出た鮮血が、黒のパーカーとパワードスーツの袖を伝って指先から滴り落ちる。

左手に握りしめたボロボロの D-3 の画面が薄暗い水溜まりの表面に青白く反射していた。

隣に立つ慎平は、勇太の横顔から急速に温度が消えていくのを肌で感じ取っていた。

苦痛に顔を歪めるのでも、怒りに肩を震わせるのでもない。追い詰められた勇太が、

自身の内側にある恐怖や痛覚を無理やり押し殺し、張り詰めたガラス細工のように表情を硬くしていく。その危うい静けさに、慎平の喉がひくりと鳴った。

「…おい、勇太。右腕、また血開いてんじゃねえか。あんまり無茶すんなよ…って言っても、ここで退くタマじゃねえか、お前は」

首の後ろを落ち着きなく掻きながら、慎平は斜に構えた低い声で呟いた。突き放すような皮肉の体裁を取りながら、その視線は勇太の足元のふらつきを誰よりも神経質に追っている。

勇太は答えの代わりに、濡れたスニーカーで一歩、慎平とターゲットモンの前へと踏み出した。

「大丈夫です、慎平さん」

返ってきた声は、戦場のノイズの中でも驚くほど静かで、平坦だった。

勇太の瞳は、ムゲンドラモンの肩の上で優越感に浸る直人ではなく、その背後に聳える東京都庁第一本庁舎の巨大なシルエットと、崩壊した正面玄関の空間を冷静に走査していた。

「それより、少しおかしいんです。

…ここへ来る前の源乃さん達の報告では、都庁の正面玄関にデジタルゲートが開いているはずでした。

でも、ここから見える範囲には空間の歪みも、ゲートの光も確認できません」

ムゲンドラモンの排熱機構が濃霧を吹き飛ばしたことで、都庁の低層階から広場にかけての視界は不気味なほど鮮明に開けている。そこに、デジタルワールドへと繋がるはずの門は存在しなかった。

「さっきまで響いていた重低音は、ゲートの崩壊音じゃなく、こいつの足音でした。…すみれさんや安所さん側からゲート消失を聞いていないですし…閉じたわけじゃない。

ゲートそのものが、都庁の内部か、もっと上の階層へ移動している可能性があります。」

「…そうかよ。」

(そうじゃねえだろ…。)

慎平は短く息を吐き出し、手に握った緑のクロスローダーを強く構え直した。



2

死地にあってなお、目の前の仇敵への私怨よりも戦局を観察している 12 歳の少年の背中に、慎平は苦い溜息を噛み殺す。
「なら、こんなところで鉄屑の相手をしてる暇はねえってことだな。…出てこい、お前ら!!!」
慎平がクロスローダーを掲げると同時、眩いデジタルゲートコードが雨の街路に展開された。
召喚の光の中から現れたのは、安所から託された現実世界に迷い込み保護したという重装甲の改造型デジモン…メタルティラノモンだった。着地と同時にアスファルトを踏み割り、鋼鉄の顎を鳴らして低い咆哮を上げる。
さらにその隣で、路面を蹴ったターゲットモンとマッハモンの身体が光の奔流となって交錯し、再構築されていく。重厚な金属の肉体から排気音とハウリングのような金属音を撒き散らしながら顕現した。
「…おい、小僧」
メタルティラノモンが、傷だらけの体躯で最前列に立つ勇太を見下ろし、低く唸るような声で慎平へ問いかけた。
「本気か？あの究極体の砲門の前に、片腕の潰れた人間ひとりを立たせておくつもりか？ 踏み潰されて終わりだぞ。」
もっともな指摘だった。パートナーデジモンすらこの場にいない生身の子供が、単身でムゲンドラモンの射線上に立つなど自殺行為に等しい。
だが、慎平が口を開くより早く、隣で肩を回していたメタルエテモンがニカッと巨大な歯を剥き出しにして笑った。
「ガタガタ言わずに構えてろっての、新入り！勇太はな、見かけによらず一番タチが悪いんだよ。人間ひとりだろうが、俺たちが合わせてりゃなんとかなる！」
「…ふん。ガンギマリってわけか。」
メタルティラノモンは鼻先から白い蒸気を吐き出しながらも、いつでも飛び出せるよう強靭な脚の装甲を軋ませて前傾姿勢を取った。
慎平は何も言わず、ただ一歩前に立つ勇太の小さな背中を見つめていた。
135cm の小柄な身体。黒のパーカーは裂け、垂れ下がった右腕からは赤い雫が滲み落ち続けている。
一番危険な前線へと足を踏み出してしまう勇太の背中は、目が潰れそうなほど眩しく、そしてどうしようもなく危ういものに見えた。
背後に控えるメタルティラノモンの荒々しい息遣いと、メタルエテモンの駆動音を背に受けながら、勇太は濡れたアスファルトを踏みしめて歩き出した。
駆け出すのではない。一歩、また一歩と、一定のリズムで間合いを詰めていく。
赤と白のスニーカーが水溜まりを踏むたび、赤い血の混じった水飛沫が小さく跳ねた。
正面に鎮座するムゲンドラモンの巨体は、近づくにつれて都市の建造物そのものが牙を剥いているかのような錯覚を覚えさせる。
背面に増設された三本爪の回転式アームが不気味に駆動し、左腕の超振動ブレードが空気を細かく震わせていた。一発でも直撃すれば、勇太の肉体など肉片すら残らず蒸発する。
一歩踏み出すごとに、右上腕の傷口が激しく疼き、視界の端がチカチカと明滅した。すみれと交わした『危険と判断したら迷わず撤退する』という約束が、脳裏の片隅で警鐘を鳴らしている。
だが、ここで背を向ければ、ムゲンドラモンの飽和砲撃が後ろの慎平たちごと都道を焼き払うことは明白だった。
都庁のどこかへ移動したゲートへ辿り着くためにも、まずは自分が囮となってあの巨体の注意と射線を一点に引きつけなければならない。
勇太は荒れ狂う呼吸を肺の奥で深く整え、恐怖で震えそうになる感情の回路を冷たく遮断したまま、鋼の怪物の懐へと真っ直ぐに歩みを進めた。



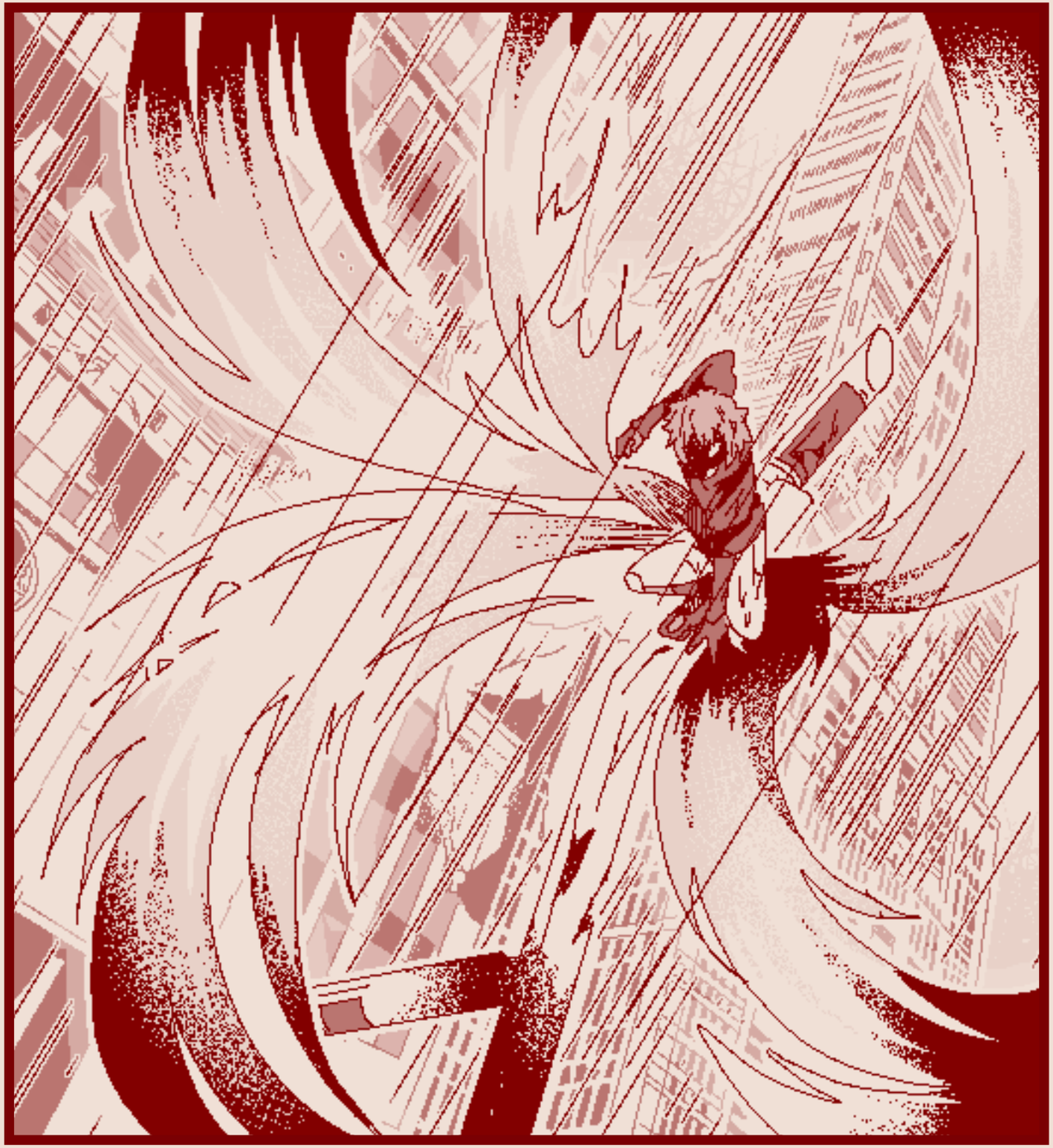
3

　ムゲンドラモンの頭部センサーの赤い走査光が、近づいてくる小さな人影を完全に捉え、砲塔の照準が微調整される駆動音が響く。
　勇太は歩みを止めず、使える左手で腰のホルスターからひび割れた D-3 を静かに抜き取った。
　幾度もの死線と無理な進化を経て、液晶には深い亀裂が走り、外装もボロボロに削れたデジヴァイス。
　本来の所有者ではなかった自分の手の中で、それでもヴォーボモンと共に選び続けてきた相棒との絆の証。
　勇太が親指で D-3 のスイッチを強く押し込むと、亀裂の隙間から翡翠色の風が噴き出し、すでに展開していたフェアリモンの脚へ流れ込んだ。
「…スピリット…エボリューション」
　叫びではなく、自分に言い聞かせるような低い呟きだった。
　D-3 から溢れ出した風のヒューマンスピリットの残存コードが、すでに展開していたフェアリモンの脚へ重なり、薄紫と白銀の装甲の輪郭を強く固定していく。スニーカーと七分丈のカーゴパンツの輪郭が眩いデータ粒子に覆われ、脚部に宿る風の密度が一段と高まった。
　踵から伸びるブレード状の装飾が路面から数センチ浮き上がり、放出された高密度の気流が周囲の雨粒と水溜まりを円形に吹き飛ばす。
　人間の脆弱な骨格では耐えきれない加速と跳躍を可能にする風の脚が、静かに戦闘機動の唸りを上げた。
　見上げるほどの高さにあるムゲンドラモンの肩部装甲と、路面に立つ身長百三十五センチの少年。
圧倒的な体格差と戦力差を挟んで、二つの視線が真正面から交錯した。



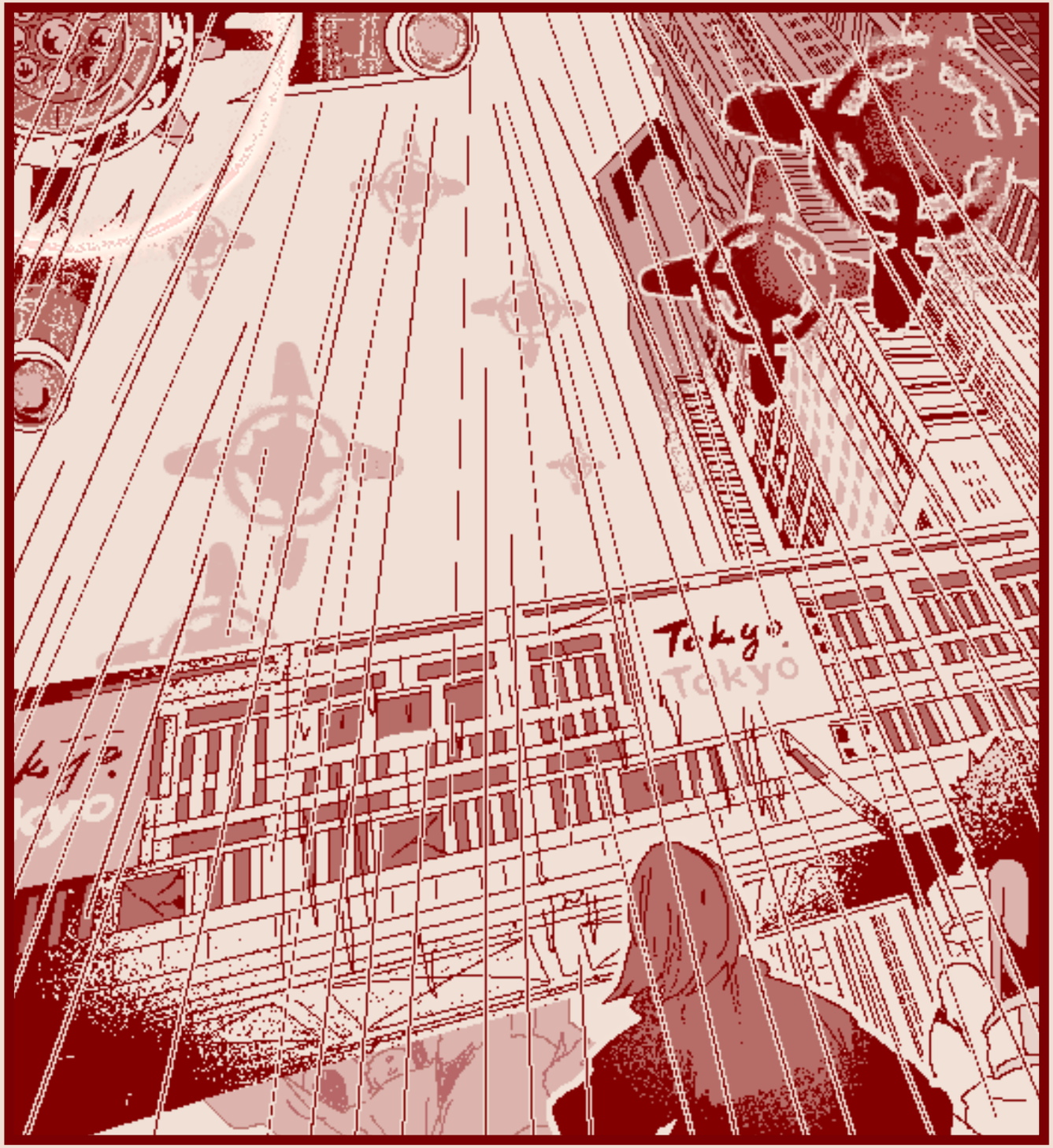
4

肩部装甲の上で、渡辺直人が猫背気味の首だけを前に突き出し、丸眼鏡の奥の目を細めて粘りつくような笑い声を漏らした。
右頭部から右胸、そして白いスキニーパンツに包まれた下半身に至るまで、ゴモラの瓦礫と炎で焼かれた重度の火傷痕が引き攣れている。
だが、その醜い傷跡すら、今の彼にとっては自分が特別な存在として生き残った証であるかのように見えた。
「…おいおい、どういうつもりだ、坊主。パートナーのトカゲもいねえ、右腕も使い物にならねえ、そんな半端な脚だけで俺様の前に立つのか？」
直人はゆっくりと、相手の逃げ道を塞ぐような穏やかさすら帯びた声で語りかけた。
「言ったはずだぞ。俺に逆らえばどうなるか、お前の母親と妹の身体でたっぷり教えてやったってな…今度はもっと酷い目に遭うぜんだぜ…俺はしつこいからよ～どこまでも追い詰めるぜ？てめえは殺さねえがその報いを手足捥ぎ取ったてめえの前で分らせてやるよ！だってそうだよなぁ!!!神の使いの俺に逆らってんだ!!!当然の報いだよな!!!???
…それとも何か？ 自分の正義とやらを通すためなら、家族がどうなろうが知ったことじゃないってか!?
立派なヒーロー様だよ!?お前は…自分のエゴで周りを不幸にしておきながら、まだ自分が正しい側に立ってるつもりなんだからな」
「…。」
自分の行動のせいで大切な人たちが傷ついたのではないか――勇太が一番恐れている傷口を、直人の言葉は正確に抉りにきていた。
崩れ落ちる教団ビルのフロアで、白い首輪をはめられた母や日花を前にしてあの男が投げつけてきた言葉と同じだ。勇太を激情へ落とし、判断力を奪って無様な暴走へと誘い込むための悪意ある挑発。
勇太の左手の拳が、D-3 を握りしめたままギリッと音を立てた。胸の奥でどす黒い怒りが沸騰しかける。だが、勇太はそれを喉の奥で飲み下し、冷ややかな目で直人を見上げ返した。
「…あんたずいぶん高い場所がお気に入りみたいだな…やめといた方がいいぜ？よく言うだろ煙となんとかって？それに口からフガフガ泡だして無駄な強がりなんて惨めなもんだ。」
勇太の声には、以前のような揺らぎはなかった。戦闘時の、低く威圧的な響きが混じる。
「光に負けて、泣きながら命乞いをしていたくせに。
…借り物の玩具見せびらかせて自分が強くなった気でいるのか？ 俺と同じ地面に立つことも怖くてできないからそんな高いとこから頑張って見下してんだろ？臆病者が人の家族をダシにして粋がってんじゃねえよ。」
「…ッ、口の減らねえクソガキが。」
渡辺の顔から余裕の笑みが一瞬で消え失せ、焼けただれた右頬の筋肉が醜く痙攣した。
渡辺の自尊心が静かに沸点に達する。怒気の混じった声を上げると同時、言葉を持たない殺戮兵器であるムゲンドラモンが即座に反応した。
砲門の発射を待つことすらしない。車道全体を塞ぐほどの質量を持った鋼鉄の巨尾が、大気を圧縮する轟音と共に横薙ぎに振るわれた。
放置車両を紙屑のように弾き飛ばし、アスファルトを抉り取りながら迫る超質量の鉄塊が、勇太の小さな身体を真っ二つにへし折らんと水平に襲いかかった。



5

大気を押し潰しながら水平に薙ぎ払われる鋼鉄の巨尾。
その刃のような装甲が勇太の胴体を捉えるコンマ一秒前、フェアリモンの脚が路面を爆発的に蹴り上げた。
踵から噴き出した圧縮空気の塊が水溜まりを爆ぜさせ、勇太の小柄な身体が垂直に跳躍する。足裏の数センチ下を、ムゲンドラモンの尾が凄まじい風圧と共に通過し、背後のガードレールと街路樹を根元から粉微塵に吹き飛ばした。
空中で体勢を捻った勇太は、そのまま通り沿いに傾いていた電柱の側面へと片足を叩きつけた。
ミシミシと電柱がひび割れる反動と、風のスピリットによる推進力を一点に重ね合わせる。
「―ッ!!!!!」
砲弾のように飛び出した勇太の右脚が、旋回動作の終わり際で隙を生じたムゲンドラモンの左側頭部…分厚い装甲板の継ぎ目へと深々と突き刺さった。
人間の筋力ではない。暴風を一点に凝縮した運動エネルギーの塊が、数千トンの巨体の重心を一瞬だけ揺るがす。硬質な金属の衝突音が新宿のビル街に反響し、ムゲンドラモンの巨大な頭部がわずかに右へと傾いだ。
(デジタルワールドで見た時より威力が上がってるな…!
だが、この一撃で分る!効いてねえようでメンタルにしっかり刺さってるっじゃねえかクソガキが!!)
肩部装甲の上で衝撃に揺さぶられた直人が、手すりを掴んだ。
その隙を逃さず、勇太は空中で二段目の風を足裏に溜め、直人のいる肩部へと一気に踏み込もうとした。
だが…その刹那、頭上の白濁した雨雲と濃霧の隙間から、幾筋もの赤い閃光が音もなく降り注いだ。
「―っ!?」
勇太は空中で強引に風を噴射し、自らの身体を横方向へと弾き飛ばすようにして軌道を逸らした。
直前まで勇太が存在していた空間を、高出力のレーザー群が貫通し、眼下のアスファルトを一直線に融解させて赤いマグマのような溝を穿つ。
着地の勢いで路面を転がりながら、勇太は右上腕の激痛に歯を食いしばって上空を見上げた。
霧の向こう側、視認できない高高度から、まるで勇太の着地予測地点を最初から全て計算していたかのように、不可視の狙撃網が張り巡らされている。
「…上か！霧の中に何か潜んでやがるな！」
後方でクロスローダーのモニターを睨んでいた慎平が、舌打ちと共に叫んだ。
敵の索敵網と射撃の仕組みはまだ完全には見えない。
だが、勇太が単身で空からの狙撃を引きつけ、ムゲンドラモンの姿勢を崩したこの数秒の好機を逃せば、再び一方的な飽和砲撃の餌食になる。



6

「おい、メタルティラノモン！ 空からの目障りな狙撃は俺たちがなんとかする！ お前は今のうちに、あのデカブツの懐へ突っ込め!!」

慎平の切迫した怒声に、メタルティラノモンの赤い双眸が光った。

「…チッ、三下!!!抜かりやがったら、あの鉄くずの前にてめえから食い千切ってやるからな!!」

悪態を吐き捨てながらも、メタルティラノモンは慎平の戦術眼の判断だけは信じていた。

重厚な改造型の巨体がアスファルトを砕いて加速し、傾いたままのムゲンドラモンの正面へと猛烈な勢いで突進を開始する。

突進するメタルティラノモンの巨体へ向けて、再び霧の上空から不気味に照準の気配が収束し始める。

「させるかよ！ ナノモン、ジャンクモン！『デジクロス』!!」

慎平がクロスローダーを振り抜くと、待機していたジャンクモンの砲身構造と、安所から託されたナノモンの精密機械データが光の渦の中で結合した。

完成したのは、火力ではなく広域電波妨害に特化した異形のパラボラと発信器を備えたジャマー形態だった。

「低性能なジェネラルにしちゃ、悪くない判断だねぇ…！ 電波領域、汚染開始（ジャミング・スタート）!!」

ナノモンの嘲笑うような電子音声と共に、ジャンクモンの砲口から目に見えない高出力の電磁パルスと攪乱ノイズが、ドーム状に空へと放射された。

大気中の水分が放電を起こし、ムゲンドラモン周囲の空間に施されていた光学迷彩とステルスフィールドが、ノイズの波紋に洗われて一斉に剥がれ落ちていく。

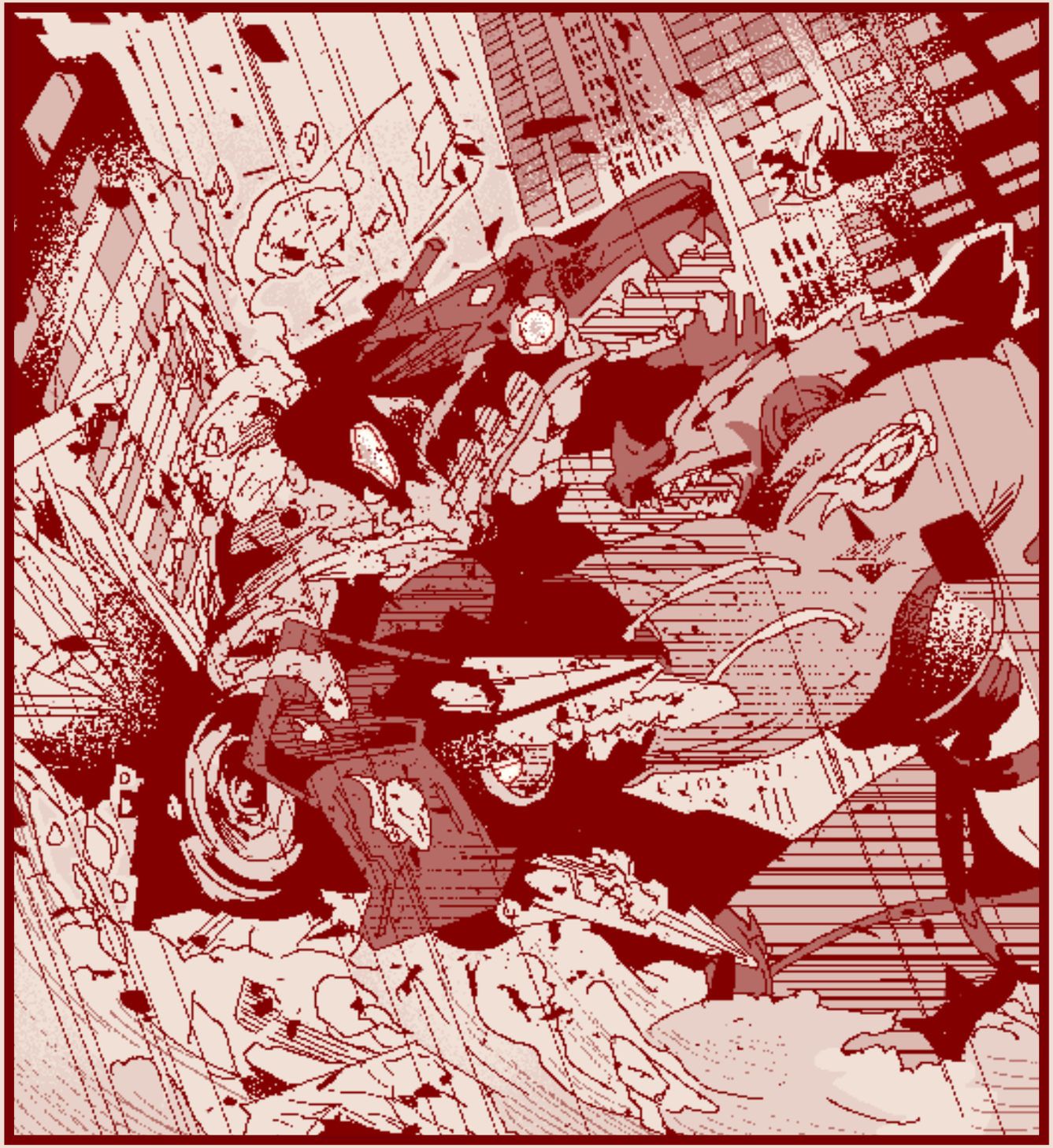
白濁した霧の中に浮かび上がった光景に、慎平は思わず息を呑んだ。

「…っ、嘘だろ、おい…！」

都庁のビル群の谷間、中空のあらゆる高度と角度を埋め尽くすように、数十機―いや、百機近い無人狙撃ドローンが浮遊していた。

かつてゴモラの廃墟で光とレディデビモンを苦しめた遠隔狙撃システムを、さらに高密度・大規模化した包囲網。

光学迷彩を剥がされた数十機のドローン群が一斉に姿勢を制御し、そのすべての銃口が、地上を走るメタルティラノモンの一点へとピタリと向けられた。



7

　数十条のレーザーが同時に放たれれば、どれほど強固なメタルティラノモンの装甲といえど、ムゲンドラモンに辿り着く前に蜂の巣にされて蒸発する。
「勇太ッ！ メタルティラノモンの頭上、角度四十度から一斉照射が来る！ 空気の層を弄れ!!」
　慎平の叫びに、勇太は思考するより早くフェアリモンの脚を駆動させていた。
　右上腕の傷口から血が噴き出すのも構わず、突進するメタルティラノモンの斜め前方、ドローン群との射線を遮る中空へと一気に跳躍する。
　真正面からレーザーを受け止めるのではない。
　これまで格上の敵を相手に幾度も死線を潜り抜ける中で身につけた、環境そのものを味方につける技術。
「散れぇっ!!」
　勇太は両脚交差させ、周囲の冷たい氷雨と、ムゲンドラモンが吐き出した高温の排気蒸気を強引にかき混ぜた。
　極端な温度差を持つ空気の塊と高密度の水滴を渦状に圧縮し、メタルティラノモンの頭上に巨大な大気と水蒸気の屈折層を瞬時に形成する。
　直後、数十機のドローンから放たれた極光のレーザー雨がその空気の壁へと突入した。直進するはずだった光線の束が、密度と温度の異なる気流のレンズを通過した瞬間に乱反射を起こし、虹色のハレーションを撒き散らしながらあらぬ方向へと一斉に屈折・拡散していく。
　外れたレーザーの雨が周囲のビル群の壁面や道路を次々と爆砕する中、直撃を免れたメタルティラノモンは一歩も速度を緩めなかった。
「おおおおらあああああああああああァッ!!」
　咆哮と共に、メタルティラノモンの数千トンに迫る鋼の肉弾が、ムゲンドラモンの胸元へと正面から激突した。
　凄まじい金属の悲鳴が轟く。
　勇太の蹴りでわずかに重心を崩していたムゲンドラモンは、その質量と突進力を受け止めきれずに後退し、都庁第一本庁舎と第二本庁舎を繋ぐ高架の連絡通路の橋脚へと背中から叩きつけられた。
　巨大なコンクリートと鉄骨の連絡通路が崩壊し､大量の瓦礫が二体の巨獣の上に降り注ぐ。
　バランスを崩して仰向けに倒れ込んだムゲンドラモンの腹部の上に、メタルティラノモンがそのままマウントポジションで飛び乗った。
「調子に乗ってんじゃねえぞ、操り人形がァッ!!」
メタルティラノモンは強化された両腕のクローを振り上げ、ムゲンドラモンの右腕――三式の改修によってドリル状の超振動破砕兵器へと換装されていた箇所の付け根を、上から何度も、何度も力任せに殴りつけ、さらに鋼の顎で噛み砕いた。
　火花とオイルが激しく噴き散り、分厚い超合金の装甲がベキベキと音を立てて圧壊していく。
　最後の一撃でメタルティラノモンが首を振り抜くと、ムゲンドラモンの右腕のドリル兵装が根元から千切れ飛び、濡れた路面へと重苦しい音を立てて転がり落ちた。
　右腕のドリル兵装を食い千切られてもなお、心を持たない機械竜には痛覚による怯みなど一ミリも存在しなかった。
「――邪魔だ、どけッ!!」



8

肩部装甲にしがみついていた直人が忌々しげに怒鳴った瞬間、ムゲンドラモンの背面にそびえる二基の巨大砲塔の角度が真下へと切り替わった。
砲撃ではない。砲口から噴き出したのは、周囲のアスファルトを一瞬でガラス質へ変えるほどの超高熱・超高圧の推進ジェットだった。
大気を震わせる噴射音と共に、数千ｔの巨体がジェットパックを背負ったかのように強引に地面から浮き上がる。
「聞いてねえぞ困難!?」
馬乗りになっていたメタルティラノモンが体勢を崩した刹那、ムゲンドラモンの残された左腕―希少な超振動破壊兵器の刃を備えた巨大な爪が、メタルティラノモンの首筋へと容赦なく突き刺さった。
「ぐ、ガアアアッ!!」
超振動の刃が装甲と筋肉を削り取る激痛にメタルティラノモンが絶叫する。
ムゲンドラモンはその首を左爪で鷲掴みにしたまま推進力を全開にし、都庁第一本庁舎の中層階…巨大なガラス張りの壁面へと、メタルティラノモンを盾代わりにして突っ込んだ。
強化ガラスと鉄骨のフレームが飴細工のように粉砕され、オフィスフロアのデスクやサーバー機器を巻き込みながら、二体の巨獣が都庁ビルの内部を抉るように斜め上へと突き抜けていく。
黒煙と粉塵が激しく噴き上がる中層階の吹き抜けで、ムゲンドラモンはメタルティラノモンを床へと叩きつけて拘束を振り払った。
その肩の上で、直人は咳き込みながら崩れ落ちたフロアの奥へと視線を走らせた。
「…あ？ なんだ、ありゃあ……」
直人の視界に映ったのは、破壊された都庁の階段やエレベーターホールをコソコソと這い回り、何かを探るように端末や配線を引っ掻き回している黄色い小動物のような群れ…慎平が先行して潜入させていたスカモン軍団と、コクワモンの姿だった。
それを見た瞬間、直人の脳内で裏の意図を計算する思考回路が高速で回転を始めた。
(…そういうことか。あの三下のジェネラル、完全体一匹で俺の三式に勝てるなんて最初から思っちゃいねえ。
このビルの上層へ移動したゲートに小汚え雑魚どもを先回りさせたのか！…アレはあの糞どもに反応しなかったのか!?…この状況にビビッて引っ込んだのか!?
チッ！俺の注意をこのデカブツに引きつけている隙に、本命のガキをゲートへ送り込む算段だな！)
自分が他者を欺き喰らってきた人間だからこそ、渡辺にはすべて誰かを駒にした出し抜きに見え、直感を刺激した。
渡辺は慌てて肩部装甲の縁へと歩み寄り、煙の立ち込める外壁の穴から、はるか眼下の都道…まだ地上に残っているはずの勇太の姿を捉えようと身を乗り出した。
「そうはさせるかよ、どこにいやがる、クソガキ…！」
だが、直人が見下ろした地上の水溜まりに、赤い髪の少年の姿はなかった。
「ここだよバカ…！」
声は、直人の真後ろ…ムゲンドラモンの背中に立ち昇る黒煙と水蒸気のすぐ内側から響いた。
ムゲンドラモンが背面ジェットで上昇したあの瞬間、勇太は噴射の乱気流と煙の死角に自らの風の脚を同調させ、巨体の背後に張り付くようにしてこの中層階まで一気に翔け上がっていたのだ。
渡辺が凍りついたように首を巡らせるより速く、煙を裂いて飛び出した勇太の身体が独楽のように鋭く回転した。
フェアリモンの脚に暴風の加速度を乗せた渾身の右上段回し蹴りが、無防備な直人の左首筋めがけて一直線に唸りを上げた。



9

渡辺の左肩から黒いデータが噴き出し変貌した異形の左腕…ダスクモンの部分進化形態が瞬時に形成された。

鈍い金属の激突音が弾けた。勇太が渾身の力で放った風の回し蹴りを、直人はダスクモンへと変貌した左前腕一本で微動だにせず受け止めていたのだ。

「なっ…!?」

「うっとうしいんだよ、糞に集るハエみたいにチョロチョロと！」

直人が左腕を無造作に振るうと、成人男性の枠を遥かに超えたハイブリッド体の膂力が爆発し、勇太の小さな身体がゴムまりのように弾き飛ばされた。

空中で辛うじて姿勢を制御した勇太は、数m離れたムゲンドラモンの左肩部装甲の上へと着地し、金属の表面を削りながら滑って片膝をついた。

「…っ、スピリット…!? なんで、お前がそれを…！」

勇太は右上腕の傷口から散る血を振り払い、すぐさま再び路面を蹴って渡辺へ踏み込もうと重心を引き上げた。

だが、その瞬間、直人の左肩と左胸の装甲に埋め込まれたダスクモンの紅い眼球が、ギョロリと不気味に回転し、勇太の姿を真正面から睨み据えた。

嫌な音が勇太の胸の奥で鳴った。

直人の鎧の眼球から放たれた不可視の波動が、勇太の網膜と神経を直接撫で回し、デジソウルを根こそぎ吸い上げていく。

「あ…!?、ぐ、う…っ!?」

呼吸が詰まり、全身の血管から急速に熱が奪われていく。

同時に、勇太の両脚を包んでいたフェアリモンの脚の装甲が、ノイズ混じりの火花を散らして明滅し、ガラスが砕けるように消滅してしまった。

風の浮力と支えを突然失った勇太の足元は、ただの濡れたスニーカーへと戻る。

踏み込もうとしていた慣性を支えきれず、勇太の身体は面白いようにバランスを崩し、冷たいムゲンドラモンの鋼鉄の装甲板の上へと無様に仰向けに転倒した。

立ち上がろうにも、手足の先に鉛が詰まったように力が入らない。

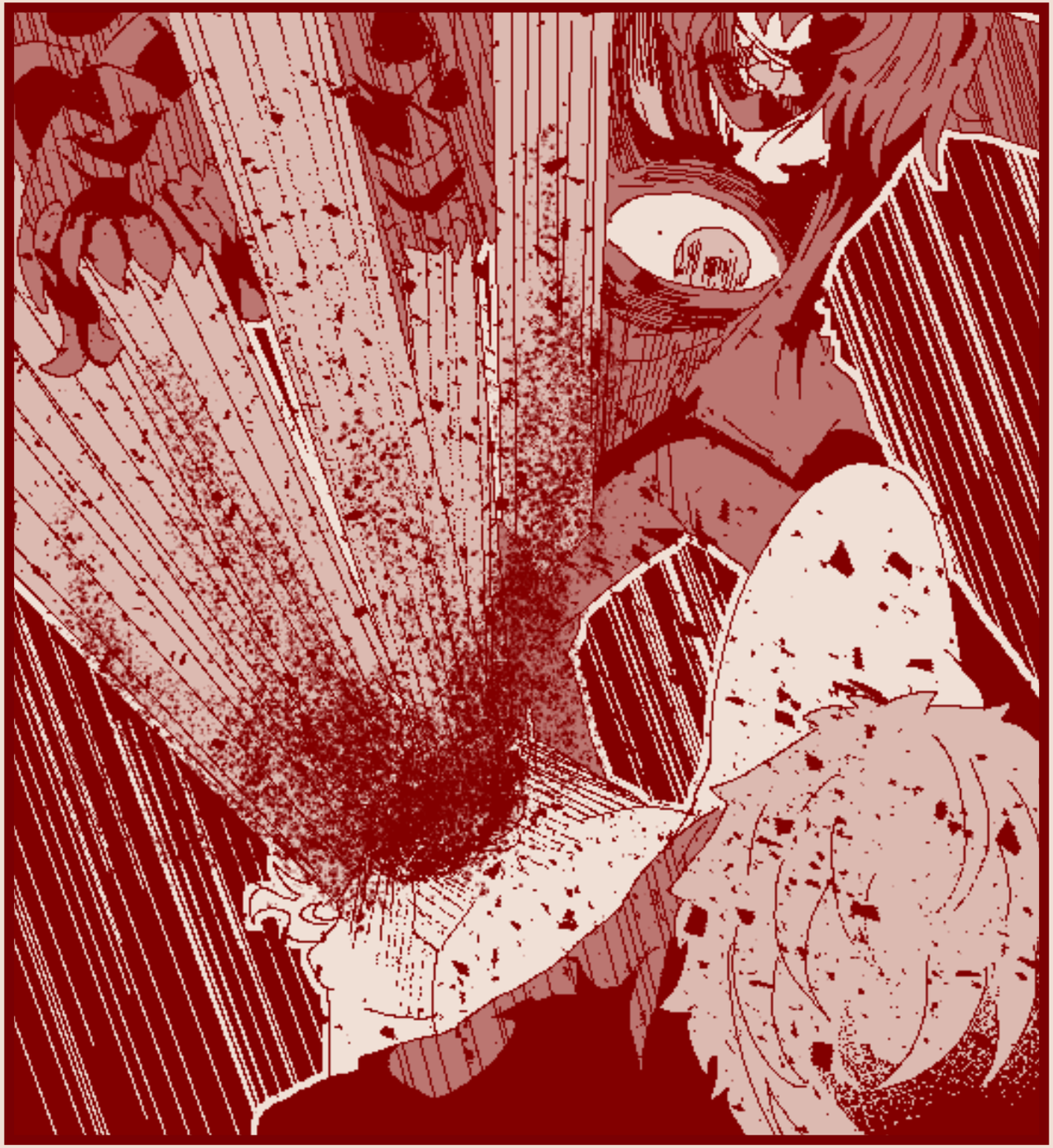
その勇太を見下ろしながら、左半身を異形の魔人と化させた直人が、革靴の踵を鳴らしてゆっくりと歩み寄ってきた。

「…ハッ。どうした、坊主？ さっきまで吹かしてた威勢が出てねえぞ」

直人は瞳の奥で、底意地の悪い、心底気持ちよさそうな笑みを浮かべた。

「人間でありながらデジモンの力を使えるのは、選ばれたヒーロー様の自分だけだとでも思ってたんじゃねえのか？

…思い上がるなよ!!!！お前がやってきたことなんざ、特別でもなんでもねえ。俺がセラフィモン様から頂いたこの力の前じゃ、お前のちっぽけな気合なんて、ただの電池切れのおもちゃだ」



直人の異形の左腕から、赤黒いエネルギーが滲み出し、亡霊の呻き声を思わせる不気味な双頭の片割れの魔剣『ブルートエヴォリューション』の刃が実体化した。

仰向けに倒れ、右上腕の出血とデジソウルの枯渇で満足に身動きの取れない勇太のすぐ横に立ち、直人は見下ろすまま無造作にその剣先を振り下ろした。

狙ったのは心臓でも首でもない。勇太が何度も立ち上がり、風を纏って自分を脅かしてきた左脚の膝だった。

肉と軟骨、そして膝蓋骨を冷たい凶器が貫通し、下にあるムゲンドラモンの装甲板に剣先が突き当たる嫌な音が響いた。

「――ッ、がああああああああっ!!」

一拍遅れて、脳髄を白く焼き切るような激痛が勇太の全身を駆け巡った。

だが、渡辺は止めない。相手が反撃不能になったと確信した瞬間から、彼の暴力は「支配の確認」と「溜め込んだ屈辱の精算」へと変わる。

「うるせえよ!!!てめえさっきの啖呵!!!誰の許可を得て俺と同じ目線に立ってんだ、テメエは!」

直人は突き刺した魔剣を一度引き抜くと、痙攣する勇太の左膝の同じ傷口めがけて、二度、三度と執拗に剣を突き立て、抉るように捻り込んだ。

と骨が削れる生々しい音と共に、七分丈の白いカーゴパンツがみるみるうちにどす黒い鮮血で染まっていく。

「!!!!???あああああっ!! あ、ぐ、うあああああああっ!!」

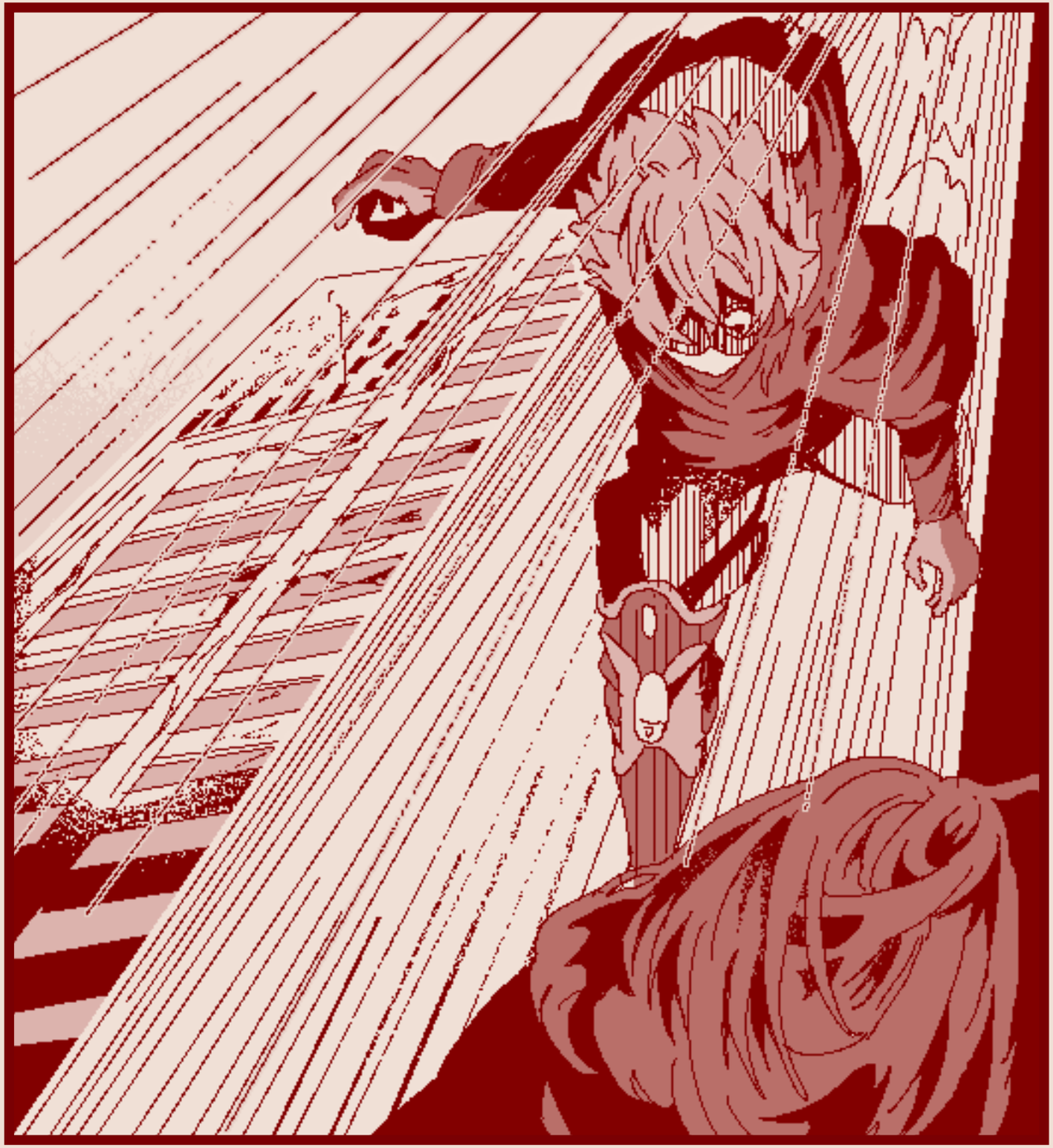
心を殺して耐えようとしていた勇太の防衛線が、純粋な肉体破壊の苦痛によって内側から食い破られる。

右上腕に続き、移動の要である左膝まで徹底的に潰され、12 歳の少年の喉から、血の泡を吐き出すような凄惨な絶叫が引きずり出された。



11

だが、直人の瞳孔が収縮した。
血と冷や汗にまみれた勇太の顔から苦痛が消えていた。
痛みと状況の衝撃から立ち直り、肺から血の混じった浅い息を吐き出しながら、勇太の両目はカッと見開かれ、覗き込んできた渡辺の双眸を、一切の揺らぎも恐怖もない、底なしの暗い熱を宿した瞳で真っ直ぐに見つめ返していたのだ。
命乞いもしない。痛みで意識を手放しもしない。ただ次はどうやって目の前の敵を殺すか。だけを測っている、異様なまでの執念の目。
「――っ!?」
直人の喉が引き攣り、背筋に冷たい悪寒が走った。
直人は裏社会の稼業の中で、そういう目をする人間を何人か見たことがあった。
損得も、自分の命の価値も、痛覚のブレーキすら完全に壊れてしまい、相手を道連れにすることしか考えていない「ネジが飛んだイカれた連中」の目だ。
だが、目の前にいるのはまだ 12 歳の小学生にすぎない。
こんな小さなガキが、膝を砕かれた直後にそんな目で自分を見上げてくるという事実が、渡辺の安全な支配者としての地位の前提を根底から脅かす敵であった。
「気色悪い目してんじゃねえぞ、クソガキがァッ!!」
恐怖を怒声で塗り潰すように、直人は反射的に右脚を振り上げ、勇太の脇腹を力任せに蹴り飛ばした。
このまま砕けた都庁の窓枠の外…数十m下の地面へと叩き落として処理するつもりだった。
だが、恐怖で直人の思考が勇太を視界から排除することへ一秒だけ逸れた、それこそが致命的な隙だった。
蹴り飛ばされて装甲の縁を滑っていくその瞬間、勇太の使える左手が、破壊された都庁の天井裏から垂れ下がっていた極太の高圧電源ケーブルを正確無比に鷲掴みにした。
勇太は自分の落下速度と体重をそのまま利用し、しなる大蛇のようにケーブルを振り回すと、蹴り足を戻そうとしていた直人の右足首へと二重に巻きつけた。
「なっ!?」
ムゲンドラモンの肩部装甲の突起を支点にした物理的な張力が働き、落下しかけた勇太の身体が引き上げられると同時に、片足立ちになっていた直人の長身が面白いように宙へと浮き上がった。
勇太が渾身の力でケーブルを引き絞ると、直人の身体は悲鳴と共にムゲンドラモンの肩から引き剥がされ、粉々に割れた都庁の外壁の穴から、雨の吹き込む外の空中へと放り投げられた。

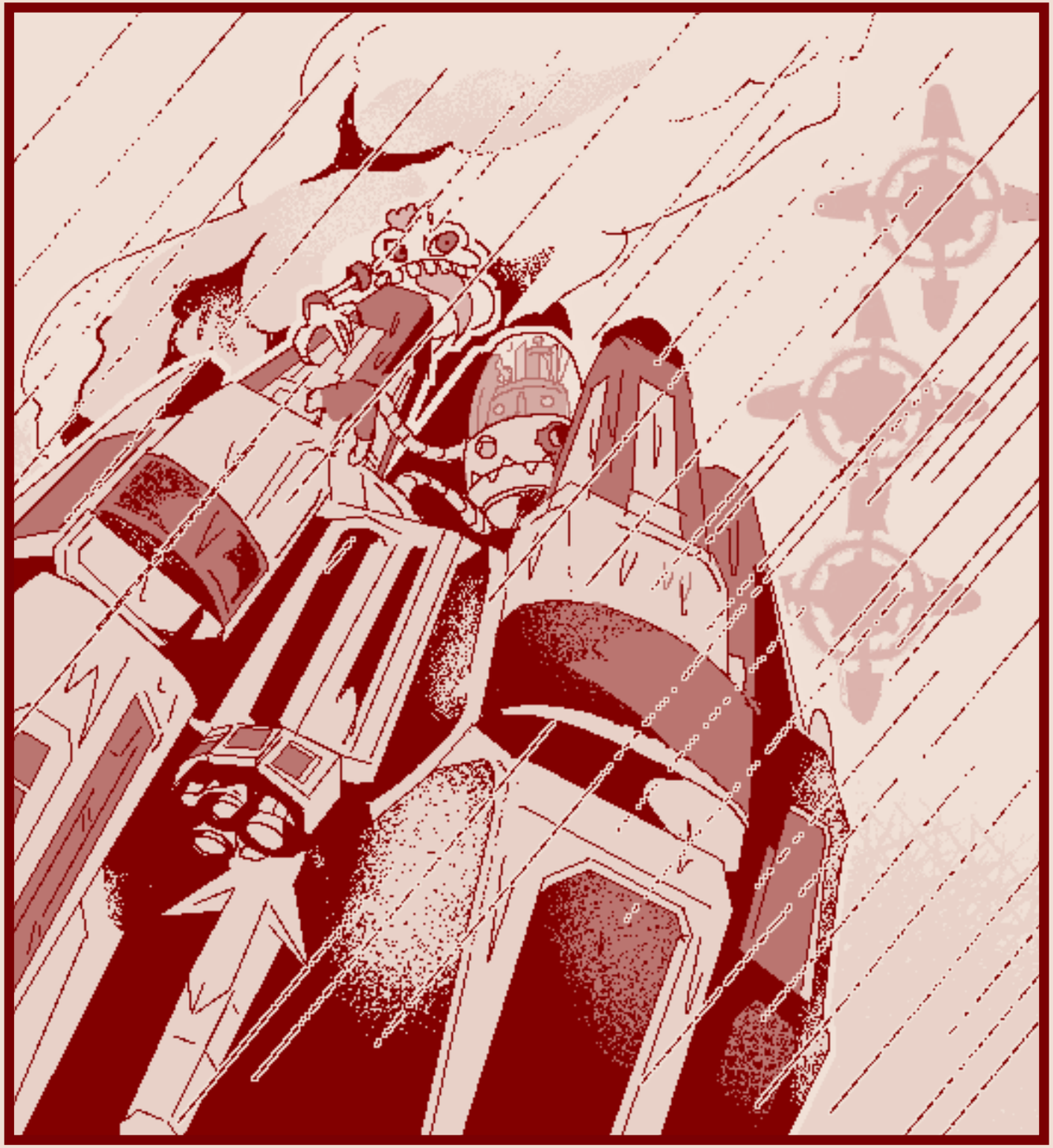


12

勇太はパワードスーツのソールを叩きつけ、壁面を蹴り下ろす摩擦と重力を利用して、まるで垂直の壁を疾走するかのように直人の真上へと肉薄してきた。
潰された左膝は血を噴き出しながらだらりと垂れ下がり、貫かれた右腕も動かない。
再展開したフェアリモンの脚もまだ風を展開しきれていない。
それでも、残された右脚一本と全身のバネだけで、何十ｍもある外壁から12歳の少年は一切の躊躇なく空中の渡辺へと牙を剥いた。
「テメエ、正気かッ!?」
渡辺が防御に左腕を上げる暇すらなかった。
落下加速度のすべてを乗せた勇太の右足の踵が、壁面にぶら下がる渡辺の顔面その鼻梁から顎にかけて、雷光のごとく直撃した。
硬質な音が弾け、丸眼鏡のレンズにひびが走る。鼻血を噴き出しながら渡辺の頭部が激しく仰け反り、衝撃で壁に突き立てていた魔剣が抜けかけた。
「!? こ、のォ……クソガキがあああああっ!!」
子供の生身の蹴りで顔面を踏み抜かれた屈辱に、直人の理性が完全に吹き飛ぶ。
計算高い取り繕っていた仮面が剥がれ落ち、剥き出しの小悪党の顔で、渡辺は空中で魔剣をデタラメに振り回し、落下する勇太の首を刎ねようと斬りかかった。
風の脚がない勇太には、空中でその刃を避ける術はない。
赤黒い魔剣の刃が勇太の喉元に届きかけたその刹那、下層の窓を突き破って跳躍してきた白銀の鋼鉄の猿が、二人の間へと強引に割り込んだ。
メタルエテモンが右手に握った鈍器のサルまわしで直人の魔剣を真正面から受け止め、火花を散らして弾き返す。
「おっと、そこまでだぜ色男！ うちの主役をこれ以上ボコボコにされたら、後で鬼嫁に殺されちまうんでね！」
軽薄な笑い声を響かせながら、メタルエテモンは空中で勇太の小さな身体を左脇にひょいと抱え込むと、直人の外壁を蹴り飛ばし、数フロア下の破壊された都庁のオフィス階層へと一気に飛び込んだ。
メタルエテモンに抱えられてオフィスフロアの床へと転がり込んだ勇太は、荒い息を吐きながら、砕けた左膝にパワードスーツの緊急固定ロックをかけて強引に添え木代わりにした。
その時、吹き抜けの外濃霧の立ち込める高高度の上空から、一筋の白い光条が雲を突き破って落下してきた。
成層圏近くを浮遊する専用支援衛星からの武装射出ポッドだった。
ポッドが空中で外装をパージすると、その中から現れたのは、四本の巨大な鉤爪が上下対称に展開する禍々しい超振動破砕アームだった。待機していたムゲンドラモン三式が、先ほどメタルティラノモンに食い千切られたばかりの右腕のソケットへとそれをドッキングさせる。
重厚なロック音が響き、失われたはずの右腕が、より凶悪な近接破壊兵装となって瞬時に完全復活を遂げた。



　ムゲンドラモンはその四本爪の右腕で都庁の外壁と柱を豆腐のように削り取りながら、勇太たちのいるビル内部へと強引に巨体をねじ込もうと侵攻を開始する。
ビルの外からクロスローダーのモニターでその光景を観測していた慎平は、唇を噛んで空を見上げた。
「チッ、上空の人工衛星から予備パーツを撃ち込んでやがるのかよ。あの衛星が、ムゲンドラモンの外付けの武器庫…あのドローンの展開数って事は外付けの演算装置兼ねてやがるのか…！」
　慎平が、敵のシステム構造を瞬時に丸裸にしていく。
　本来のムゲンドラモンは、あそこまで精密に数十機のドローンを同時制御しながら武装換装を行えるような器用なデジモンではない。
　上空の衛星が本体とリンクして演算を肩代わりし、さらにその衛星と本体の中継網を守るように数十機のドローンが展開している。
　つまり、あの衛星からの補給と通信リンクを断たない限り、何度腕を壊してもムゲンドラモンは無尽蔵に修復され続ける。
　一方、ビル内部のフロアでは、ムゲンドラモンの侵入によって天井のコンクリートスラブを音を立てて崩落し始めていた。
（あぶねえ…！これならこのフロアにはあのデカ物は入ってこれねえはず!!）
　勇太とメタルエテモンが落下してくる天井の瓦礫に注意を割かれた、その一瞬の隙だった。
　外壁に張り付いていたムゲンドラモンの分厚い胸部装甲が左右に大きく展開し、その内部の格納庫から、全長2mほどの対人・高速格闘用の龍人体が弾丸のような速度で射出された。
　同時に、外壁からフロアへと飛び込んできた直人が「まだ終わりじゃねえぞ、クソガキども！」と叫ぶ。
　狭い屋内空間を、射出された龍人体が音速に近い機動で駆け巡った。
「くそっ、速え!?」
　メタルエテモンがサルまわしを振るうが、龍人体は狭い柱やデスクの隙間を自在に跳び回り、死角から鋭い爪と尾の連撃を叩き込んでくる。勇太も少しずつ回復し始めたデジソウルを振り絞って再びフェアリモンの脚から風を展開し、風の防壁でメタルエテモンを援護するが、砕けた左膝と右腕の負傷が響き、龍人体の圧倒的な手数とスピードにじりじりと壁際へと追い詰められていく。
　龍人体の鋭い爪が、ついにメタルエテモンの装甲を弾き飛ばし、後ろの勇太とすぐ脇で指示を出していた渡辺の近くまで踏み込んだその時だった。
「上だァッ、ムゲンドラモン!!」
　頭上の吹き抜け、さらに三つ上の階層の床を突き破って、首筋からオイルと血を流したメタルティラノモンの巨体が、壁際に立つ渡辺直人の脳天めがけて隕石のように落下してきたのだ。
　自分の身に直接死の危険が迫った瞬間、渡辺の思考はすべて自己保存へと振り切れた。
　勇太にトドメを刺す寸前だった龍人体が、ピタリと攻撃を止め、光のような速度でムゲンドラモン本体の胸部格納庫へと引き戻されていく。
　そして、龍人体が胸部に収まったのとほぼ同時に、それまで外壁に引っかかって完全に静止していた大型のムゲンドラモン本体が突如として再起動し、四本爪の右腕を振り上げて、直人に迫るメタルティラノモンの巨体を横から殴り飛ばした。
すさまじい衝撃でフロアの床が抜け落ちる中、風で瓦礫を避けた勇太の瞳が、今の一連の挙動を捉えていた。
（…やっぱり、チラと見えてたゴモラで光たちと戦った時と同じ…！）



14

　メタルエテモンが咆哮と共に飛び出し、サルまわしをムゲンドラモンの四本爪の隙間へと強引にねじ込んで超振動の刃をロックする。
　同時に、勇太がフェアリモンの脚で局所的な暴風の渦を巻き起こし、ムゲンドラモンの頭部センサーへ瓦礫と粉塵を叩きつけて視界を奪った。
　その隙に、床の瓦礫を蹴り砕いて起き上がったメタルティラノモンが、ムゲンドラモンの換装されたばかりの右肩のジョイント部へ再び食らいついた。
「さっきの続きだァッ！ 何度付け替えようが、全部スクラップにしてやるぜ!!」
　メタルエテモンの打撃、勇太の風圧、そしてメタルティラノモンの顎の咬合力が一点に集中する。
　換装されたばかりの四本爪の超振動アームが、けたたましい金属の悲鳴を上げて火花を散らし、再び根元のソケットごとバキバキに粉砕されて床へと崩れ落ちた。
　しかし、二体の大型デジモンが激しい肉弾戦を繰り広げたことで、すでに限界を迎えていた都庁中層階の構造躯体が悲鳴を上げた。
　太い鉄骨の梁が折れ曲がり、足元のコンクリート床が斜めに大きく傾き始める。足場が次々と崩落していく中では、巨体のメタルティラノモンは満足に踏み込むことができず、左膝を負傷している勇太とメタルエテモンの動きも鈍らざるを得ない。
「させるかよ！ ドローン、蜂の巣にしろッ!!」
　フロアの奥へ退避した渡辺がヒステリックに叫ぶと、割れた窓の外から数十機の狙撃ドローンが一斉にビル内部へと雪崩れ込んできた。
狭い屋内空間を縦横無尽に飛び交うドローン群から、逃げ場のない高密度のレーザー弾幕が浴びせられる。
　メタルエテモンが身体を張って弾き返し、勇太も風で軌道を逸らそうとするが、崩れ落ちる天井の瓦礫と全方位からのレーザーに阻まれ、徐々に防御の手が回らなくなっていく。
　そして、床が大きく抜け落ちて勇太の左足が宙を掻き、メタルエテモンとメタルティラノモンの体勢が同時に崩れた、その間の一瞬だった。
　中空に展開した数十機のドローンのすべての赤い照準レーザーが、無防備に晒された勇太の胸元と額の一点へと収束した。
「くたばれ、日野 勇太ァッ!!」
　渡辺の歓喜の叫びと共に、ドローン群の砲口に致死量の光がチャージされる。風を起こす時間も、誰かが盾に入る余裕もない。
　だが――発射の閃光が奔るよりコンマ一秒早く、すべてのドローンの赤いレンズが、バチッ！ と不自然なノイズを散らして一斉に消灯した。
「…あ？」
　渡辺の間抜けな声がフロアに響く。
　次の瞬間、推進力を失った数十機のドローンが、まるで糸の切れた鉄塊のようにバラバラと床の瓦礫の上へ墜落し始めたのだ。
　それだけではない。都庁の割れた窓のはるか上空、厚い雨雲の隙間から、火達磨になった巨大な支援衛星の残骸が、黒煙を曳きながら新宿の空を斜めに墜落していくのが見えた。
「ウヒヒヒッ！勇太あああ!!!上空の中継アンテナと制御端末、ぜーんぶウンチとウイルスで埋め尽くしてやったぜーっ!!」
「まったく、スカモンどもの雑な仕事のおかげで回路を焼き切るのに手間取ったよ。…これで、そのデカブツの外付け脳みそはおしまいだねぇ！」
　都庁の上層階と通信施設へ潜入していたスカモン達の笑い声と、コクワモンの放電でセキュリティをこじ開け、ベロニカとの通信リンクへ直接ハッキングを仕掛けたナノモンの勝ち誇った電子音声だった。



「お待たせしたなあ!!!!鉄屑野郎ッ!!」
　地鳴りのような咆哮と共に、メタルティラノモンが傾いた床を踏み抜いて突進した。
　硬直したムゲンドラモンの胸元へ頭からぶち当たり、その巨体を抱え込むようにして、粉砕された都庁中層階の外壁の穴から、何もない外の空中へと諸共に飛び出したのだ。
「なっ!!!??う、わあああああああああっ!?」
　渡辺の絶叫が雨空に木霊する。
　高層ビルの中腹から、地上へ向けて真っ逆さまに落下していく二体の巨獣。
　メタルティラノモンは落下するムゲンドラモンの身体の上で再び強引にマウントポジションを取ると、重力加速度をそのまま拳に乗せ、ムゲンドラモンの顔面と胸部装甲を上から何度も、何度も滅多打ちに殴り続けた。
　空中でありえないほどの破砕音が連続で轟き、装甲の破片が雨粒と一緒に四散する。
　落下の途中、衝撃でシステムが緊急再起動したムゲンドラモンの左肩のムゲンキャノンがゼロ距離で火を噴いた。
　超高熱のエネルギー砲弾がメタルティラノモンの右肩を掠め、分厚い装甲と肉を容赦なく抉り飛ばす。
「舐めるな!!!鉄屑!!!こんなもんで、止まるかよォッ!!」
　右肩から大量の鮮血とスパークを噴き出しながらも、メタルティラノモンは一切攻撃の手を緩めない。むしろ痛みを怒りへと変え、鋼鉄の顎でムゲンドラモンの首元のケーブルを食い千切り、両拳を振り下ろし続けた。
そして――。
　メタルティラノモンは、ムゲンドラモンの巨体をそのまま墜落のクッションとして下敷きにし、都庁前のアスファルト路面へと超質量で叩きつけた。
　マグニチュード数級の激震が新宿の街を揺らし、路面がクレーター状に陥没して、泥水とコンクリートの破片が津波のように周囲へ弾け飛んだ。
　メタルティラノモンは、ムゲンドラモンの巨体を踏み台にして跳び下がり、待機していた慎平の後方へと退避した。
　だが、着地した途端にその強靭な脚がガクガクと折れ曲がり、メタルティラノモンは片膝をアスファルトに突き立てて激しく吐血した。ゼロ距離でムゲンキャノンに抉られた右肩からはどす黒い血とオイルが滝のように流れ落ち、全身の装甲もひび割れて、立っているのがやっとという満身創痍の状態だった。
「…ハァ、ハァ…っ、おい、小僧。注文通りに、引きずり下ろしてやったぞ…。」
「…ああ。マジで上出来だぜ、あんた。」
　慎平が不敵に笑いながら短く応じる。



16

そこへ、崩壊した都庁の壁面を伝って、勇太を抱えたメタルエテモンと、潜入を終えたスカモン軍団たちが次々と地上へと降り立ち、慎平の周囲へと再集結を果たした。

メタルエテモンの腕から降りた勇太は、パワードスーツのロックで固定した左膝を引きずりながら、慎平の隣へと並び立った。

勇太は状況に油断せずに、龍人体の情報を慎平へ伝えた。

「…なるほどな。借り物の要塞に引きこもってる王様が、一番怖がってるのは自分の生身の命ってわけだ。…これで終わってその情報も無駄になればいいんだがな。」

右上腕の傷口も、砕けた左膝も、息をするだけで意識が遠のきそうなほど痛む。それでも、勇太の瞳は前方のクレーター…黒煙の中でと不気味な金属音を鳴らして再び蠢き始めたムゲンドラモンの影から一秒たりとも逸らされていなかった。

衛星は落ち、右腕の武装も砕き、地上へ引きずり下ろした。だが、あの三式と渡辺直人はまだ完全に沈んではいない。ここから先が、本当のトドメの局面だった。

隣でクロスローダーを握り直す慎平が、首の後ろを一度だけ掻き、前を向いたまま低い声で言った。

慎平は大きなため息を吐いた後に、初めて獰猛で皮肉な笑みが浮かんだ。
濁った緑のラインが入ったジャージの袖で汗を拭い、慎平はニヤリと口角を吊り上げる。

「…だがな…詰みまでの道筋は見えたぜ。…おい、勇太。あのデカブツを完全にスクラップにする作戦がある。

…だから、とにかく俺を今回の一回だけ信じて、もう一回だけ突っ込め。」

斜に構えた言い回しだったが、その声の奥には、自分の立てた作戦で重傷の勇太をさらに死地へ送り出すことへの、隠しきれない微かな震えと不安が滲んでいた。
自分が主役として責任を背負うことへの、慎平自身の根源的な恐怖。

勇太は、そんな慎平の横顔を見ることすらなく、ただ静かに口角を上げて答えた。
「何を言ってるんですか、慎平さん」

左手に握ったひび割れた D-3 を胸の前に構え、傷だらけの身体で一歩、前へと踏み出す。
「最初から…ずっと信じてますよ。」

迷いのないその一言に、慎平が小さく息を呑み、そして観念したように苦笑いを浮かべてクロスローダーを高く掲げた。

黒煙の向こうで、装甲を剥がされたムゲンドラモン三式と、血塗れの渡辺直人が立ち上がる気配が膨れ上がる。雨の新宿で、すべてを決する次の一撃に向けた構えが整った。